

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月4日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21401022

研究課題名（和文） 北東アジア諸言語の複統合性をめぐる類型的・史的比較研究

研究課題名（英文） Comparative study on polysynthesis of the languages in North eastern Asia from typological and historical point of view

研究代表者 呉人 徳司 (KUREBITO TOKUSU)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：40302898

研究成果の概要（和文）：

本研究では、4年間に亘り、北東アジア地域に分布する系統が異なる諸言語の複統合性の違いに焦点をあて、現地調査による一次資料に基づいて類型論的な視点からその形態論・統語論的特徴の考察を進めた。とりわけ、他動性、結合価の変更、属性叙述、接辞と倚辞の区別、語彙的接辞とコピュラとの関係などについて研究成果を挙げ、国内外の学会、学術雑誌等で発表し、北東アジア地域の諸言語研究に貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：

In this research we examined morphological and syntactic characteristics of the languages of north eastern Asia, which are genetically unrelated with each other, with special focus on different degrees of polysynthesis, based on the data collected during filed work of each language. Especially we could accumulate more study results on transitivity, valency change, property predication, differentiation between affixes and clitics, and relation between lexical affixes and copula, which we have presented at conferences and in scholarly journals for these four years. Through these studies we could contribute to the study on the languages of the north.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2011年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2012年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：北東アジア諸言語、複統合性

類型論、他動性、結合価、

語意的接辞、統語論

1. 研究開始当初の背景

20世紀後半から、言語類型論の主流が形態論的特徴をてがかりに言語全体の類型を明らかにするホリスティックな研究から、統語論を対象に言語の部分的な特徴の解明

へと移行してきた。言語の形態的類型の2つのパラメータである「統合度 synthesis」と「機械的な粘着度 mechanical cohesiveness」の概念は、必ずしも十分に検討、深化されないまま、統語論のめまぐる

しい理論研究の展開の隅に押しやられていることで否定できない。北東シベリアのチュクチ語、コリヤーク語は、複統合的言語として知られているが、その南にはツングース、チュルク、モンゴルという日本語と類似した動詞複合体を持つ統合的なアルタイ諸語が広範に分布している。また、その狭間には、同じく統合的なユカギール語やアイヌ語、さらには、孤立的といわれるニヴフ語といった様々な統合度の言語がある。このように、系統が異なる北東アジアの諸言語を複統合から、統合、孤立などより広範なタイプに広げ、相互比較することにより、形態論的類型を画定するために最も基礎的なパラメータである「統合度」と「粘着度」に関する研究の進展を図ることがある。

2. 研究の目的

本研究では、複統合から孤立まで多様な統合度を示す北東アジア諸言語の形態論的特徴に関し、現地調査により一次データを収集し、類型論ならびに史的観点から相互に比較対照することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者と研究分担者が現地調査に入る前の事前準備として研究打ち合わせを行い、4年間の研究の主なテーマ、現地調査の手法、時期、規模などについて協議した。そしてロシア、中国、モンゴルなどにおける現地調査では、各言語の母語話者から、文法に関する聞き取りを実施し、文法の記述を進めた。また、各言語の母語話者から民話資料を採集し、分析を行い、それをコンピュータ入力してデータベース化を進めた。具体的に言えば以下の通りである。

研究代表者の呉人徳司が実施したチュクチ語の調査では、これまで代表者自身が発表してきた名詞抱合、語彙的接辞、動詞の屈折などに関する成果をより精緻化し、チュクチ語の複統合性を支える動詞複合体の構造的特徴の解明に努めた。名詞抱合に関しては1998年に執筆した論文の中で記載されている年配のチュクチ人のデータをもとに、若い世代のチュクチ人から聞き取り調査をおこない、ロシア語を日常生活でよく使う若い世代が話すチュクチ語において、いかなる統合度の変化が見られるかを検証した。また、同系のコリヤーク語、アリュートル語とも統合性に関して比較対照し、語族内部の相互関係の解明を目指した。民話や語りに関するテキストの収集は、聞き取り調査だけではわから

ない、自然発話における語の顕現の様態をよりよく理解するための助けになるため、これまでの調査で得られたチュクチ語の形態論に関するデータを再確認し、複統合的な特徴を示す語、例えば、1つの長い語からできるチュクチ語独特の早口ことばとなぞなどを集め、分析した。一方、語彙調査は、現在編集集中の *A Topical Dictionary of Chukchi-France-English-Russian* の各項目に関する補足調査が中心になったが、これにより、チュクチ語の語形成のより詳細な情報をえることができた。モンゴル語に関しては、ロシアのカムイク共和国、ブリヤート共和国、中国の西北地域、モンゴル国で現地調査を実施し、モンゴル諸語の形態論、とりわけヴォイスに関する記述研究を通して、ヴォイスの動詞複合体における位置づけを明らかにした。

研究分担者の風間進次郎は、主にロシアの極東地域に分布するナーナイ、ウィルダ、ネギタールなどのツングース諸語の動詞複合体を構成しうる文法的語幹派生接辞、コピュラ、時制などについて、現地調査を行ない、その生産性を考察した。あわせて物語等のテキスト資料の収集に努め、動詞複合体の用例を引き出すより大きなコーパスを構築した。

研究分担者の呉人恵は、コリヤーク語の統合性に重点をおき、調査を進めた。コリヤーク語は、チュクチ語などと同様に、アジア側の複統合的な言語として知られている。これまで、コリヤーク語の記述研究を進める中で、その統合性を高める手段である語彙的接辞や抱合の問題、他動性をヴォイスに関しても一定の知見をえてきたが、本研究では、これまでの研究をさらに発展させただけでなく、他の北方諸言語との類型論的な研究を行った。

研究分担者の遠藤史は、ユカギール語の文法変容に関する基礎的な資料の収集と分析に重点をおき、記述研究を進めた。また、今から約100年前にロシアの研究者ヨヘリソンにより収集されたコリマ・ユカギール語の言語資料を中心に、ユカギール語の歴史的研究を再分析し、現在までに蓄積された資料をコンピュータ入力してデータベース化した。

研究分担者の白石英才の専門がニヴフ語音声学と音韻論であるため、ニヴフ語音声資料の採録と分析が主な研究になり、最初年は国内で保管されている音声資料との比較を行った。そして翌年からニヴフのアムール方言とサハリン方言の比較研究を行ない、語形成に関してどのような相違点が観察されるかを探った。さらに、形態論に関して、ニヴ

フ語の統合度に関して、これまでのロシア国内の研究とアメリカ人による研究を再検討し、名詞が動詞と合成するいわゆる名詞抱合の扱い、格の振る舞いなどについて、類型論的な研究を進めた。

4. 研究成果

4年間の研究では、系統が異なる北東アジア地域の諸言語を複統合から、統合、孤立などより広範なタイプに広げ、相互比較し、類型論的な研究を進めた結果、動詞の複統合性、他動性、結合価の変更、属性叙述、複合動詞、準動詞、複合名詞、名詞化、接辞と倚辞の関係などに多くの成果を挙げることができた。具体的には以下の通りである。

研究代表者の呉人徳司は、チュクチ語の複統合性を示す名詞抱合について、現地調査で新たな例、現象を見つけ、これまでの研究を大きく前進させることができた。また、動詞の他動性、結合価の変更について深く考察し、その成果を国内外の学会で多く発表し、論文として刊行することができた。さらに、モンゴル語の他動性について記述研究を行ない、その成果として英語で論文を執筆し、方言間の類似点と相違点を探った。2011年3月に出版した *Linguistic Typology of the North (Vol.2)* は、本科研費による研究の大きな成果の一つである。

分担者の風間進次郎は、4年間の研究において、主に類型論の視点から記述研究を行ない、多くの成果をあげることができた。具体的に言えば、ツングース諸語の語彙的な接辞とコピュラからはじめ、アルタイ諸語の複文と複文における相対テンス、準動詞、感情動詞など動詞を中心に研究であり、その成果を *Linguistic Typology of the North (Vol.2)*、『アジア・アフリカの言語と言語学』、『北方言語研究』、『北方人文研究』などの学術雑誌や論文集に論文として多く刊行した。また、ツングース諸語の話者から採集した民話集を数冊出版し、研究者だけでなく、現地の人たちにも還元することができた。

分担者の呉人恵は、4年間ロシアにおけるコリヤーク語の調査・研究を通じて、記述文法を進め、大きな研究成果を収めた。とりわけコリヤーク語の他動性、能格性、ヴォイス、属性叙述、形容詞の性質などについて、国内外の学会、研究会で発表したほか、*Linguistic Typology of the North (Vol.2)*、『言語研究』、『北方言語研究』に多くの論文を寄稿した。

分担者の遠藤史は、4年間の研究において、ユカギール語の現地調査によって収集した資料の整理を進めつつ、ヨヘリソン、クレイノヴィチ、クリロフらによる資料も加

えて、主に類型論的な視点から形態論・統語論的特徴の考察を進めた。その結果として、他動詞節の特徴、複合名詞、接辞と倚辞の区別によるユカギール語固有の形態論的特徴を明らかにし、主に日本語で論文を執筆し『北方人文研究』、『環北太平洋の言語』等に寄稿した。

分担者の白石英才は、ニヴフ語の現地調査の成果として、ニヴフ語の逆受動構文について日本語で論文を執筆したほか、母音の削減などについて英語で海外の学会で発表した。また、ロシアの研究者と協力して、音声資料の分析を進め、民話テキストを三冊の本として出版した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

- ① 風間伸次郎「対照言語学的観点からみた相対テンスについて」、『北方言語研究』3号、北海道大学、2013年3月、177-199 (査読付き)
- ② 呉人恵「コリヤーク語動詞の自他対応—中立型か他動詞化型か—」、『北方言語研究』第3号、北海道大学、2013年3月、85-109 (査読付き)
- ③ 呉人恵「コリヤーク語の形態的・統語的能格性—動詞の一致と節接続を中心に—」、『北方人文研究』第6号、北海道大学、2013年3月、47-64 (査読付き)
- ④ 遠藤史「ユカギール語の他動詞節における目的語の標示について」、『経済理論』371巻 (和歌山大学経済学部紀要)、2013年3月、1-18 (査読無し)
- ⑤ 白石英才 “Phonologically conditioned allomorphy in Nivkh”, *Asian and African Languages and Linguistics*, Vol. 7, (アジア・アフリカ言語文化研究所) 2013年3月、67-79 (査読付き)
- ⑥ 呉人徳司 “An Outline of Valency-Reducing operations in Chukchi”, In Wataru Nakamura & Ritsuko Kikusawa (eds.) *Objectivization and Subjectivization: A Typology of the Voice Systems* (Senri Ethnological Studies 77), National Museum of Ethnology, Osaka, Japan, 2012年3月、77-89 (査読付き)
- ⑦ 風間伸次郎「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」、『北方言語研究』第2号、北海道大学、2012年3月、139-162 (査読付き)
- ⑧ 遠藤史「コリマ・ユカギール語の複合名詞をめぐって」、『北方人文研究』第5号、北海道大学、2012年3月、141-157

- (査読付き)
- ⑨ 呉人恵「チュクチ・カムチャツカ語族における属性叙述—N形の意味・機能の異同に着目して—」、『北方言語研究』第2号、北海道大学、2012年3月、115-137 (査読付き)
- ⑩ 呉人徳司“Transitivity in Mongolian”, In Tokusu Kurebito (ed.) *Linguistic typology of the North*, Vol.2, 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所, 2011年3月、105-116 (査読無し)
- ⑪ 風間伸次郎“Are there lexical affixes in Tungusic, or what is the lexical affix?”, In Tokusu Kurebito (ed.) *Linguistic typology of the North*, Vol.2, 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所, 2011年3月、55-66 (査読無し)
- ⑫ 呉人恵「コリヤーク語の属性叙述—主題化のメカニズムを中心に—」、『言語研究』第138巻、日本言語学会、2010年9月、115-147 (査読付き)
- ⑬ 風間伸次郎「ナーナイ語の複文について：条件形式の使い分けを中心に—」、『北方言語研究』第1号、北海道大学、2011年3月、115-138 (査読付き)
- ⑭ 呉人徳司「チュクチ語の結合価の変更に ついて」、『アジア・アフリカの言語と 言語学』第4巻、東京外国語大学 アジ ア・アフリカ言語文化研究所、2010年 3月、111-132 (査読付き)
- ⑮ 風間伸次郎「ナーナイ語の非人称形動 詞について」、『アジア・アフリカの言 語と言語学』第4巻、東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所、 2010年3月、133-148 (査読付き)
- ⑯ 呉人恵「コリヤーク語の-Nvo が表わす始 動アスペクトと習慣アスペクト」呉人 恵、『北海道立北方民族博物館研究紀 要』第19巻、北海道立北方民族博物館、 2010年3月、1-13 (査読付き)
- ⑰ 遠藤史「コリマ・ユカギール語の複合 名詞とその類型論的位置づけ」、呉人 恵 (編)『環北太平洋の言語』15巻、 2010年3月、1-15 (査読無し)
- ⑱ 白石英才“Modelling initial weakenings” In Kuniya Nasukawa & Phillip Backley (eds.) *Strength Relations in Phonology*. Berlin: Mouton de Gruyter, 2009年10月、183-218 (査読付 き)

[学会発表] (計18件)

- ① 呉人徳司“A Comparative Study of Vowel Harmony: Directionality vs. Dominance”, 55th Permanent International Altaistic Conference, Cluj-Napoca, Rumania, 2012年7月24

日
ssia, 2012年8月23日

- ② 呉人徳司“Chukchi as a polysynthetic language”, International Workshop on Documentation and Description of the North”, Tokyo University of Foreign Studies, 2012年12月2日
- ③ 呉人徳司“Valency Change in Chukchi: Decrease Derivations and Increase Derivations”, University of Sonora, Hermosillo, Mexico, 2013年3月22日
- ④ 白石英才・Bert Botma “Asymmetries and attractors in Nivkh vowel sequences”, Manchester, UK, 2012年5月13日
- ⑤ 遠藤史「ユカギール語における名詞化・名詞節—コリマ・ユカギール語の動名詞の機能を中心に—」, 「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」、国立国語研究所、2012年12月19日
- ⑥ 呉人恵「コリヤーク語における自他対応」, 「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性に関する研究会」、国立国語研究所、2012年6月30日
- ⑦ 呉人徳司“Voice in the Mongolic Languages”, International Workshop on Typological Studies of China”, University of Hong Kong, 2011年7月21日
- ⑧ 呉人徳司“On Tense in the Mongolic Languages”, International Workshop on Reconstruction of Time in Asian Languages, Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan, 2011年10月27日
- ⑨ 呉人徳司“Voice and valency change in ergative and accusative languages: Focusing on Chukchi and Mongolian”, International Workshop on Transitivity and its Related Phenomena, Tokyo University of Foreign Studies, 2011年12月2-3日
- ⑩ 遠藤史「ユカギール語の他動詞節における目的語の標示について—類型論的視点からの考察—」, アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「北方諸言語の類型論的比較研究」第5回研究会、東京外国語大学、2011年7月9日
- ⑪ 白石英才“Phonologically driven allomorphy in Nivkh transitive verbs”, International Workshop on Transitivity and its Related Phenomena, Tokyo University of Foreign Studies, 2011年12月3日
- ⑫ 呉人徳司“Valency change in Chukchi”, The Second Conference in Linguistics within the Birgit Raising

Language Program, HUMANITIES OF THE LESSER-KNOWN, Centre for Languages and Literature, Lund University, Sweden, 2011年9月11日

- ⑬ 吳人恵 “Property and Event Predication in the Koryak Language: An Argument for a New Predication Type Theory”, The Second Conference in Linguistics within the Birgit Raising Language Program, HUMANITIES OF THE LESSER-KNOWN, Centre for Languages and Literature, Lund University, Sweden, 2011年9月11日
- ⑭ 白石英才 “Breaking as articulatory conflict resolution: the case of Nivkh”, オランダ言語学会, University of Utrecht, 2011年2月15日
- ⑮ 吳人徳司 “Comparative Study of the Voice in Mongolian Dialects”, The 52nd Annual meeting of the PIAC ‘Myth and Mystery in the Altaic World’, Inner Mongolia University, Hohhot, China. 2009年7月27日
- ⑯ 吳人徳司 “The relationship between causative and passive in Mongolic languages: with a focus on Mongolian language”, The 20th anniversary of Korean-Mongolian diplomatic relations KAMS International Symposium’, Seoul, Korea, 2010年3月28日
- ⑰ 白石英才 “Quantitative Adjustment in Nivkh”, The 2009 Seoul International Conference on Linguistic Interfaces (SICOLI 2009), Yonsei University, Seoul Korea, 2009年6月24日
- ⑱ 吳人恵 “Formation on Split-adjectives and its Typological Characterization in Koryak”, The 8th Biennial Conference of the Association for Linguistic Typology, University of California, Berkeley, U. S. A, 2009年7月25日

〔図書〕 (計8件)

- ① 風間伸次郎『ナーナイ語諸方言の研究』、ツングース言語文化論集 57、453 ページ、2013年3月
- ② 白石英才・ガリーナ・ローク (編)『オリガ アナトリエヴナ・ニャヴァン』ニヴフ語音声資料 9、札幌学院大学、77 ページ、2012年8月
- ③ 吳人恵・佐々木冠 (編)『日本の危機言語一言語・方言の多様性と独自性』、北海道大学出版会、334 ページ、2011

年5月

- ④ 風間伸次郎『ナーナイ語諸方言の研究』ツングース言語文化論集 54、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、390 ページ、2012年3月
- ⑤ 吳人徳司 (編) *Linguistic typology of the North, Vol. 2*, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2011年3月, 125 ページ
- ⑥ 吳人徳司 (編) *Chukotka Studies* No. 5, Faculty of Humanities, University of Toyama, 2010年3月、123 ページ
- ⑦ 風間伸次郎『ウデへ語テキスト6』ツングース言語文化論集 47、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、259 ページ、2010年3月
- ⑧ 白石英才 *Topics in Nivkh Phonology: A description and analysis of the sound system of Nivkh*, VDM Publishing House, 136 ページ, 2010年3月

〔その他〕
ホームページ等

<http://www.ling-atlas.jp/>

(吳人徳司)

<http://ext-web.edu.sgu.ac.jp/hidetos/> (白石英才)

6. 研究組織

(1) 研究代表者 吳人 徳司
(KUREBITO TOKUSU)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：40302898

(2) 研究分担者

風間 伸次郎 (KAZAMA SHINJIRO)
東京外国語大学・大学院総合国際
研究院・教授

研究者番号：50243374

吳人 恵 (KUREBITO MEGUMI)
富山大学・人部学部・教授
研究者番号：90223106

遠藤 歴史 (ENDO FUBITO)
和歌山大学・経済学部・教授
研究者番号：26263672

白石 英才 (SHIRAIISHI HIDETOSHI)
札幌学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：10405631